
長門有希の微笑

熊谷のな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

長門有希の微笑

【Nコード】

N1234K

【作者名】

熊谷のな

【あらすじ】

ハルヒは俺にアルバムを渡してきた。そして俺は気づいてしまった。本当に大切なことに。そして俺はあいつのいる文芸部室へやって来たんだ。

(前書き)

下手っぴですが書いて見ました。涼宮ハルヒの憂鬱の二次創作です。長門メインで書きました。よければ読んでみて下さい。

「ねえっ、キョンこんなの出てきたをだけど」

いつもの大声でそう言いながらハルヒは俺に何やら本みたいな物を手渡してきた。

中を見るとそれはアルバムだった。

「懐かしいでしょ。高校を卒業してもう3年にもなるからね」

俺やハルヒ達は、3年前に北高を卒業した。

高校卒業と同時にハルヒの能力は消えた。

現代に用がなくなつた朝日奈さんは未来に帰り、小泉をはじめとする機関の人達は能力が失くなり解散した。

そして俺とハルヒは同じ大学に進学した。あの頃は色々あったが、今はまあ、付き合っていたりする。

長門の今はわからない。

「本当に懐かしいな。あの頃はお前に散々振り回されたな。」

俺は冗談混じりにそう言った。半分くらいは本気だが。

「う、うるさいわね。あれは、ほら感情の裏返しよ」

ハルヒは慌てた様子でこう言った。

「まあ、良い思い出じゃないか」

そう言いながら俺はアルバムのページをめくっていった。

そして突然、俺は何か違和感を感じた。

何か大切な事を忘れているような、そんな感覚だ。それが何なのか考えているとハルヒが話しはじめた。

「あたしね、ずっと自分が思った通りに世界は回ると思ってた。実際、あたしの思い通りにならないことなんてそうなかったわ。でもね、途中でその考えは変わったの。あんたが好きだと気づいてからよ。最初、ライバルはみくるちゃんだと思ったわ。でも、途中からはみくるちゃんには負けないなって思うようになった。けどね、もっと大きな壁があったわ。……有希よ。あの子には勝てない気がした。ずっと怖かった。だから、あんたに告白して付き合えるようになって本当に嬉しかった」

そう言い終わると急にハルヒは赤くなり、喋らなくなった。

俺も同じように赤くなっていたと思う。

でも気づいてしまった。違和感の原因に。気づかない方が良かったかもしれない大切なことに。

「悪い、ハルヒ急用を思い出した」

そう言って俺は走り出した。

俺はドアの前に立っていた。

ひどく懐かしい。

俺はそのドアをノックし開けた。

何も変わっていなかった。

長テーブルもパイプ椅子も本棚も奪い取ったパソコンもあった。

そして一人の少女がパイプ椅子に腰掛けて分厚いハードカバーを

読んでいた。

「やっぱりここにいたのか。俺は確かめたい事があってお前に会いに来たんだ」

少女はこちらをちらりと見たがすぐに本へと視線を戻した。

「長門、お前、俺の心进行操作しただろ」

今度は長門はこちらを見すらしなかったが俺は構わず続けた。

「ハルヒのアルバムを見ていて俺は違和感を感じたんだ。そして気づいた。俺はずっとお前を見ていた。俺はハルヒに告白されてそれに応えた。ハルヒが好きだったからだ。でもあの頃の俺はお前しか見ていなかった。本当は俺はお前が好きだったんだ」

そう俺が言い終わると少ししてから長門は言った。

「そうするしかなかった。あなたが涼宮ハルヒを拒絶することになれば世界は崩壊していた。しかしあなたが涼宮ハルヒを受け入れたことで涼宮ハルヒにとって彼女の力は必要なくなり消失し、情報統合思念体は悲観したが世界が彼女によって崩壊する可能性は0になった」

「そうか、でもな、気づいた事はもう1つあるんだ。俺はお前を見ていたけどそれだけじゃない。お前も俺のことを見ていたんだ。なあ、長門。お前は俺のことをどう思っていたんだ」

「私は造られた存在。あなたたちのように感情をもたない」

「長門ッ!」

俺はそう叫び、続けた。

「頼む、本当のことを教えてくれ」

すると長門はすつと立ち上がり言った。

「胸、頭脳に異常発生。何らかのエラーと思われる。胸が痛み演算機能が上手く作動しない。原因を」

俺は長門を強く抱きしめ叫んだ

「長門、俺は今でもやっぱりお前が好きだ」

長門の瞳から1粒の涙が流れた。

2粒、3粒とそれは増えていき、長門はこう呟いた。

「私も、あなたを愛している」

そこには、涙に濡れてはいるが世界中のどんな物より輝く笑顔があった

(後書き)

勢いで書いてしまいました。少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

読んで下さった方に感謝を捧げつつ、今回はこれで失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1234k/>

長門有希の微笑

2010年10月28日08時11分発行